

# 自由の大地を求めて

——南オーストラリアに於けるドイツ移民——<sup>1)</sup>

中 村 浩 平

## はじめに

赤道を越えて日本のほぼ南方に位置するオーストラリアは1988年に建国200年を迎えた歴史の浅い国である。

「1787年5月13日、日曜日の早朝、11隻からなる第一次流刑船団は、780人にのぼる囚人と、海兵隊員、自由移民の商人など、およそ1200人を乗せて、イギリスのポーツマス港を離れた。艦隊は一路、知られざる南の大陸、『テラ・オーストラリス』と呼ばれてきた植民地に向け出港したのである。この時、いったい何人の囚人が、1万5000マイルに及ぶ航海安全を期待したであろうか。宗教の自由をめざして自らの意思でアメリカ新大陸に向かったピューリタンたちは、少なくとも新天地に対する期待で燃えていたはずである。それに対し、彼らは流刑囚として未知なる大陸オーストラリアに棄民されるに等しかった。たとえ苛酷な航海を無事になし遂げたとしても、新大陸に対する何の知識も持ちあわせていない彼らにとって、毎日がパンと水を求めてさ迷い歩く、生存のための闘いになることは十分すぎるほどわかっていた。しかも、囚人たちは、死刑に相当する流刑で強制的に送り出されたのであり、いわば、死出の旅に等しいものであることを悟っていたであろう。…彼らの心がどれほどすさんでいたかは、シドニー上陸直後にたて続けにおこった数々の事件からも想像できるのである。」<sup>2)</sup>

ここにオーストラリアの歴史の原点がみられる。つまり、オーストラリアは流刑の地であり、そこに送り込まれた囚人たちが、広大な不毛の大地に挑み、その開発に大きく貢献したのである。そしてこの事実は今日でもオーストラリアの人々

の意識に深く根ざしているように思われる。「…、私が言いたいことは、オーストラリア人はヨーロッパ系の血を継いでいるものの、知的レベルからいえばかなり低俗な囚人から形成されていたということです。それゆえいつも『外部のものに対して警戒心を抱いている人種』と言えます。イギリスがこの地で植民を開始したのですが、社会の成り立ちそのものが、低俗な囚人すなわち被支配グループと、それを監督、命令する官吏という支配グループの二つのクラスに二分化されたままスタートしています。あとに入植してきた自由移民は、この囚人に鎖のクビキを象徴する何かを入れるべきであるとさえ考えています。オーストラリアを考える際、この歴史の原点を、まず私たちは最初に認識すべきです。」<sup>3)</sup>

オーストラリアはこのようにイギリスの流刑植民地として建設され、その歩を踏みだしたので、その後、自由移民<sup>4)</sup>が増えるにつれて、イングランド、スコットランド、ウェールズ、アイルランドからの移民が多くなったのも当然であろう。その結果としてこの国の発展に於いて、以後、アングロサクソン系の色彩が強くなり、今日に至っているといえよう。

そうした中でヨーロッパからの非イギリス系の移民の中で最大の集団を形成しているのがドイツ人のグループであり、「彼らは、例えば、南オーストラリアなどで、入植の初期から大きな役割を果たした。ワインの産地として名高い、アデレード北方のバロッサ・ヴァレイは、彼らが中心となって開拓した地域である。しかし、このドイツ人さえも、人口に占める割合は約4.2%にすぎず、イギリス系の住民に対抗するような集団となることはなかった。」<sup>5)</sup>

しかし少数派とは言え、ドイツからの移民たちはすでに19世紀の前半から現在に至るまで、多くの分野、とりわけ芸術、科学、政治、経済の分野ですぐれた業績をあげ、今ではこの国にドイツ系オーストラリア人としてしっかりと根を下ろしているのである。

そしてそのなかに、19世紀前半に宗教的理由から祖国を去り、新しい天地を求めて、そこで自分たちの宗教的自由をえようとした人々がいた。彼らはルター派の人たちであったが、彼らが目指したのは南オーストラリアであった。彼らの新天地への移住は人変な困難続きであったが、とにもかくにも幾多の苦難を乗り越えて、移住を実現し、着実に、新しい移住地での地歩を築き上げてきた。

本稿では、以下、南オーストラリアに信仰上の理由で移り住んできたドイツ・ルター派の人々、いわば宗教的亡命をした人々に焦点を当てて、彼らの亡命の発端から、移住地での定着、そして夢の実現にいたるまでを見てみたい。

## 1. ドイツ移民の歴史的背景

19世紀前半にドイツは一つの国家としてはまだ存在してはおらず、プロイセンとオーストリアの二大勢力をはじめとして、多くの領邦国家に分かれていた。そして南オーストラリアに移住したルター派の人たちはプロイセンからの人たちであった。そこで、なぜプロイセンのルター派の人たちが祖国を去り、亡命の道を選ぶに至ったのか、彼らを亡命に駆り立てたものは何であったのか、その背景を知るために、まずプロイセンの歴史を追い、それから彼らを取りまいていた当時の状況を見てみよう。

フランスに1789年に革命が起こって、「アンシャンレジームの終末が宣言されたとき、フリードリヒ大王亡きあとのプロイセンは、その甥フリードリヒ・ヴィルヘルム2世(位1786-97)の治下に暗い時代を過ごしていた。同じ専制君主でも前王とは対照的な暗君であったこの国王は、私行上の評価も悪く、とりまきの婦人たちの言葉に左右されて神秘思想に凝ったり、政治を佞臣たちに任せたりという具合でおよそ君主の資格に欠け

る男であった。当時盛んになっていた啓蒙思想の影響を恐れてその弾圧を意図し、すでに1788年には、宗教勅令、検閲勅令を発布していたが、革命の報に接するとますます取締を強化した。』<sup>6)</sup>

フリードリヒ・ヴィルヘルム3世が王位に就いたとき(1797年)、プロイセンはフランス革命の余波を受け、その影響下にあった。この優柔不断な国王のもとに不振の時代を続けるが<sup>7)</sup>、1806年の対ナポレオンとの戦いでプロイセンは敗北を喫し、ポーゼンを含む多くの領土を失い、その領地はエルベ河の東に限られた。最初はドイツ人の多くはフランスの支配を歓迎し、プロイセンは、農民の解放、職業選択の制限撤廃、行政機構の改革など、一連の改革を導入した。ユダヤ人はキリスト教徒と同じ権利を与えられ、軍隊は再編され、教育も改善されたが、これらはいずれにせよ、フランス革命とは違って、いわば「上」からの改革<sup>8)</sup>であった。

ナポレオンの敗北のあと、1815年のウィーン会議で、プロイセンはポーゼンおよび失った領土を再び取り戻し、さらに西方に余分に領土を獲得した。プロイセンは、オーストリアが、「これまでも増してドイツ色の薄い多民族国家という性格を強めた」<sup>9)</sup>のに対して、ラインラント、ヴェストファーレンなどの「ドイツの社会的最先進地帯」<sup>9)</sup>を獲得したために、「ラインの防御という全ドイツ的な使命を与えられたのである。』<sup>9)</sup>プロイセンは、オーストリア、ロシアとともに「神聖同盟」を形成するが、プロテスタント、カトリック、オーソドックスというキリスト教の共通のベースの上に立って、反動的になり、革命的、民族的、民主的思想や運動を抑圧するようになった。

抑圧体制のもとしばし平穏な時代が続くが、復古と反動の時代であり、自由主義は抑圧され、「古い貴族勢力が再び力を得、改革は途中で挫折してしまった。』<sup>10)</sup>自由な出版は許されず、既成の秩序に挑戦する思想を表した教授や作家たちは牢屋に入れられるか、あるいは亡命をせざるを得なかった。

フリードリヒ・ヴィルヘルム3世は敬虔なキリスト教徒であり、宗教に寛容を求めていた。しかしそれは、フリードリヒ大王の宗教の相違を認

める寛容とは違って、普遍的な兄弟愛の寛容といったもので、必要ならば、法律や力によってでも、強制すべきものであった。国王は、カルヴィン派とルター派を結合させて新しいプロイセン福音派領邦教会を設立し<sup>11)</sup>、「旧絶対主義国家によってほぼ完全に放棄された国家による教会支配を復活させ、教会を国王に従属させた。これによって彼は特殊プロイセン的なプロテスタンチズムを創出した。」<sup>12)</sup> 国王は、彼の宗教的寛容を押し付けたが、ルター派のある小グループは、彼らルター派独自の教義が脅かされると、異議を唱えた。国王は自ら編纂した礼拝書の導入をもくろんだが、ほとんど至るところで批判され、神学者シュライアマッハーにも反対された。そこで国王は、若干の修正と追加をし、この修正版礼拝書は、上からの強い圧力が加えられなかったにもかかわらず、今度はシュライアマッハーを含めて、改革派、ルター派の両教会の大部分の牧師に受け入れられた。

しかしルター派の少数の人たちは、ルター派の信仰に反するとして反対し続け、国家と教会に対して深い不信の念を抱いた。このルター派の反対グループの人たちは、他の人たちが領邦教会に加わることに反対はしなかったが、彼ら自身にとって、改革派とは離れたままでいる歴史的権利があると、主張した。そのために、彼らは「分離主義者」であると非難されたが、自分たちは数世紀にわたって存在してきたルター派教会に留まっていたいと願っているだけなので、教会から離れたのは自分たちではなくて、むしろ、新しい教会を作って合同した人たちであると、主張した。

この異議を唱えたルター派の人たちは全員が単に無知で狂信的な農民と村の職人ばかりではなかった。その指導者はブレスラウ大学の3人の教授（シャイベル博士、フシュケ博士、シュテフェンス教授）であり、善良な市民であった。このグループは、国王の教会合同に関する法令に抵抗したので、反逆者呼ばわりされた。しかし国王は、領邦教会は続けられるべきで、彼の編んだ礼拝書も使われるべきであると決めていたので、厳格なルター派の人々が抵抗して彼の大事な計画の続行を脅かすことに、当然立腹した。国王はそれ故、

反ルター派の宗教大臣フォン・アルテンシュタインの勸言で、たえず新たな申し立てをルター派に対して行った。この抗争はやがて内閣全体を巻き込むことになり、司法大臣フォン・ミューラー、内務大臣フォン・ロッホウは、国王の政策に対して強い不賛同の意を非常に明白に表明した。しかしルター派の敵対者であることをはばからないフォン・アルテンシュタインがこの件では決定権を握っていた。

このように1830年から1840年までは、醜い宗教抗争が絶え間なく続いた。闘いの激情にかられて、ルター派の人たちは領邦教会および、改革派である国王を直接守らなければならない改革派教会にたいしてとくに、極端に中傷的な声明を出した。他方、当局側はルター派に平和の攪乱者で不服従市民であるとの烙印を押し、警察が、ときには軍隊さえも、出動した。国王もルター派の出した中傷の言葉に責任があった。というのは、国王は国家の教会を強く支持する余り、秘密礼拝集会をいかなる形でも認めず、ひどく嫌った。そしてルター派はこの範疇に入れられたからである。

1834年2月28日に国王は声明を出したが、とくにその結論<sup>13)</sup>の為に、あらゆる和解のチャンスを損ね、たんにルター派の反対を強めることになった。そして領邦教会への抵抗がより活発になったとき、当局は力の行使に踏み切った。当局のルター派に対するきびしい弾圧、そして権利の侵害は、領邦教会の信奉者の間にさえ不満の声を呼び起こした。秘密裏に礼拝や司牧活動が行われた場合には、個人および信徒共同体全体に対して厳しい罰金が科せられた。支払うことができない場合、財産がすべて没収され、そのため彼らの多くの者が極貧に陥った。多くの人々が逮捕され、牢屋に入れられた。ルター派の人たちは警察に厳重に監視され、秘密の礼拝がしばしば解散させられた。ついには、彼らの牧師の全員が、逃亡によって逮捕を免れた者を除いて、じょじょに牢屋に入れられるか、あるいは任地から移動させられた。ヘーニゲルンでは、信徒が教会の引き渡しを拒否したとき、歩兵一個大隊と騎兵100人が進駐し、集まっていた信徒達を解散させ、教会を力づくで接収した。兵士たちは、とくに信仰の篤いル

ター派の家を宿舎として、占拠中滞在した。

このような抑圧的状况下で、ルター派の人々は、もはやこの地で信仰共同体を守り抜くのは困難と考え、結局、諸宗派間の過去のさまざまな平和協定とプロイセン民法に基づいて、移住（移民）の権利を懇願した<sup>14)</sup>。しかし、政府に対する請願、国王への申請はいかなる事態の改善をももたらさなかった。ルター派のあるグループがベルリンでじきじき請願をしたとき、彼らは市を退去するように命ぜられ、立ち去らないとわかると、軍隊によって排除、移動させられた。当局は最初ルター派による移住（移民）の申請をこげおどしの脅迫と見なし、単に彼らが自分の思いどおりになり、譲歩を得るためにしているとみていたが、やがてその見解を変えた。そしてほどなく移住（移民）の問題に徹底的に取り組むようになった。

## 2. 移民への道

このようにして、プロイセンのルター派の人々の前に移住（移民）の道が開かれたようにおもわれたが、「ルター派の人々の移民は、厳しい闘争なしには、容易にかつ滑らかに起こらなかった。この闘争は2年間続いた。」<sup>15)</sup>そしてこの移住（移民）する計画はたいへんに難しいものであることが、すべての人々に明らかになってきた。ルター派の多くの牧師や信徒たちは強く移住（移民）することに賛成したが、ルター派のこの運動の指導者たちは移住（移民）に反対した。両者の対立は、シャイベル博士とグラバオ牧師のあいだで闘わされた論争に明白に示されていた<sup>16)</sup>。指導者たちは、もめ事が収まるであろうことを望んで、ルター派の仲間たちに待つように説得した。人々は、「あなたが受ける苦しみを恐れるな。悪魔は試みるために、あなたがたのうちの者を獄に投げ入れる。あなたがたは、十日間苦難に遭うであろう。」（黙示録2章10節）の言葉を思い起こしたという<sup>17)</sup>。

プレスラウで1835年に開かれた第一回ルター派教会総会で移住（移民）の問題が詳細に論じられ、賛成理由が7、反対理由が9あげられた<sup>18)</sup>。総会は、少なくともその時点では、移住（移民）に

関して方策を決定しないことに決めた。

1836年に、ルター派指導者たちのあらゆる不安と警告にもかかわらず、驚くべき数の移住（移民）の申請が、ポーゼン、シュレーゲン、ボンメルン、ブランデンブルクの各当局に出されたとき、政府は移住（移民）運動を促進させず、実際は妨害した。これは、当局者がしばしば強調するように、遠い未知の大陸での移住者たちの不確かな運命を思いはばかっていることなのかどうかは、明らかではないが、むしろ「分離主義者」の頑なさにてこずり、しかも移民を通して、実際に世界中の人々に、プロイセンは信仰と良心を抑圧しているという見方が広がらないように望んでいたためであろう、と思われる<sup>19)</sup>。

移民の許可はほぼ2年間遅滞した。この遅滞の責任者はまたしても宗教大臣フォン・アルテンシュタインであった。宗教的理由で移住（移民）するときのすべての許可はアルテンシュタインが出していて、彼はその許可を拒んだ。彼は国王に、移住（移民）運動全体がルター派の指導者たちによって慎重に企てられたものであると告げた。その結果、扇動者を見つけ出す法的調査が開始された。しかし法的手続きをとっても、扇動者がいるという主張は証明できなかった。それにも拘らず、許可は依然として与えられなかった。代わりに、移民運動がとくに顕著であった、上述の4つの地方に4人の高官が派遣され、移住に熱心であった人たちに、この件でいかなる不正義も彼らには為されないことを示した。高官たちは、領邦教会と新しい礼拝書について説明することによってルター派の人々を説得して、支持を取り付け、味方にしなければならなかった。そしてとりあえず彼らに移住することを断念させた。しかしこの1836年に実行された大キャンペーンは実際には効果はほとんど無かった。そこで1837年に国王はもう一度領邦教会評議員で宮廷付牧師のシュトラウス博士をチュリヒャウとメセリッツへ特別キャンペーンのために派遣した。しかしこれもまた効果がなかった。

当時、移住（移民）は十分な資力があるという証明しだいで決定されるようになっていたので、要求されている資金を得るために人々がその財産を売



る必要がある場合、新たな遅滞が生じた。そして後に、移住（移民）が始まったとき、政府は、人々と同じ宗教的見解を持っている牧師が彼らに同伴し、外国で彼らと運命を分かち合える場合にのみ、人々の移住（移民）を承認するとして、移住（移民）をさらに困難なものにしようとした。当局は、ルター派の牧師は実際に移住（移民）を唆してはいたが、彼ら自身は移住（移民）をだいたいは断念するであろうと、見ていた。また当局は、このように要求することによって、反対派全体のうちの最も危険な指導者たちを取り除き、残った指導者層を味方につける絶好の機会になると望んでいた。

このようなさまざまな事柄はたしかに移住（移民）運動を妨害はしたが、止めさせることは出来なかった。しかし承認を得ることの遅れは移住（移民）を決めた人々にとっては耐えがたき苦難となった。彼らの多くは、法律は一定の条件のもとで移住（移民）を許可すると理解して、すでに財産を売っていた。そして、彼らが旅行と新しい故郷となる移住地で必要とする資金が、政府による許可遅延のために、絶えず減少して行くのを見ていた。時間がいたずらに浪費され、またしてもアルテンシュタインが、内務大臣および法務大臣の移住（移民）許可の懇願に反対した。

政府の抑圧的な態度はすでにプロイセンの国外で反応を引き起こしていた。プロイセンからのルター派の人々の移住（移民）を支持する運動は、1837年にロンドンで発議されたが<sup>20</sup>、カーヴェル牧師<sup>21</sup>が、自分の名を名乗って参加することを望まなかったため、失敗に終わった。ロンドンの聖職者や慈善家のグループが、プロイセン・ルター派の人たちの移住（移民）を妨害することに反対する抗議集会を開こうと計画し、そこでカーヴェル牧師を出席するようにと招いた。彼は参加を断ったが、というのは、ルター派の信条は確かに、宗教の自由が危険にさらされている国を去るのを許してはいるが、同時に、彼らの信条は自分たちの政府にたいして干渉する外国勢力に彼らが訴えることを禁じていたからである。カーヴェル牧師の否定的な反応の結果、プロイセンへ外国の圧力を加えようとして計画されたこの集会は開催され

なかった。しかし、このような情勢は諸外国の注目を呼び起こした。こうした中で最初の移住者たちがすでに移住先を求めて旅を始めていたが、彼らは許可を得ずに、国を去ったのである。

1837年春には国王は依然として認可を拒否するアルテンシュタインの提案に同意していたが、ついに秋には（9月2日）、移住（移民）にたいする承認が原則として与えられた。国家は彼らの移住（移民）によって失うものはもともと何もないのである。こうして移住（移民）を決意したルター派の人たちは最終的に一般的な許可を与えられたのである。3月から5月にかけて、最初のルター派の移住者<sup>22</sup>たちが、すでに述べたように、許可を与えられないままにボンメルンを去り、移住地を目指していたが<sup>23</sup>、紆余曲折の後に、移住（移民）運動の中で目的地として残った2つの国、アメリカとオーストラリアの中から南オーストラリアへ向けての旅が彼らの最終目的地となった。そして、最初にルター派の人々の移住（移民）を促進し、最初の移民グループを導いたのがルター派のカーヴェル牧師であった。カーヴェル牧師引率のルター派グループは移民を組織し始めたとき、前途にはなにも困難は無いらろうと予想していたが、プロイセン政府は旅券の発行を拒否し、たちまち困難な状態に陥った。この窮状を救ったのが、アンガス<sup>24</sup>であった。彼は組合教会員、つまり非国教徒であり、それゆえ、同様にプロイセンで国家の教会と不一致である人々に強い連帯感を抱いていた<sup>25</sup>。彼は迫害されたルター派の人々に温かい思いやりを示したのである。彼は最初のルター派移民を乗せるために、ハンブルクに船（サラ号）を廻したのであったが、交渉がもたつき、サラ号は結局役に立たず、他の使用目的のためにイギリスへ回航された。彼は一行の身元引き受け人となり、そのことによってプロイセン政府との困難な問題がようやく解決されたのである。1838年4月19日であった。そして彼ら一行189名はハンブルクからプリンス・ジョージ号に乗船し、1838年7月8日、日曜日の早朝に南オーストラリアへ向かった。途中、カーヴェル牧師を乗船させるために、イギリスのプリマウスに寄港した。アンガスもルター派の人々に挨拶のた



カーヴェル牧師の記念墓碑

め船を訪れた。船は悪天候のため出帆が遅れ、7月31日にプリマウスを出港した。航海中、人々は最初ひどい船酔を経験したが、やがて克服できた。しかし熱帯のおそろべき暑さは耐え難いものであった。船上で一行のうち14人が死亡した。それでも、船上で彼らの精神は高揚していた。礼拝がはじめて何の妨害もなく行われ、迫害の時に経験した妨害の後では、とくに神への感謝を感じていた。彼らは喜びのうちに讃美歌と祈りを神に捧げた。「わたしたちは“われらすべて唯一の神を信ず”と“いと高き神に栄光あれ!”をうたった」とカーヴェル牧師の弟、フェルデナント・カーヴェルは1839年1月27日付けのアデレードからの手紙の中で書いている<sup>26)</sup>。そして11月18日(日曜日)にカーヴェル牧師とその一行は、ながい苦難の時を乗り越えて、新しい信仰共同体を築くべく、南オーストラリアのハウルドファスト湾<sup>27)</sup>に着いた。カーヴェル牧師は以後オーストラリア移民運動およびオーストラリアに於けるドイツ・ルター教会の発展全体の中で重要な役割を果たすのである<sup>28)</sup>。

### 3. ドイツ移民と移住地

4カ月余りにおよぶ長い旅の後に、ルター派の一行が乗ったプリンス・ジョージ号は最終的にアデレード港の上流にあるミザリー港に停泊した。埠頭などはなく、まだ整備もされてなく、マンガ

ローブの生えた沼地のままで、ぞっとするような状態であったので、この「惨めな」という名前と呼ばれていた。ひとびとは水夫の背におぶさって陸に上がった。植民地は依然として大部分は未開発のままであった。そこでは彼らの移住地や仕事について何の準備もなされていなかった。言葉も知らず、事情も習慣も知らなかったため、最初彼らは無力感に襲われた。気候は暑く、乾燥していた。そのため丘陵の上で火事が起きて、彼らの注目を引いた。彼らは、2・3週間アデレード港でキャンプを張った。その後、一行の旅に同行し、その世話をしていたフラックスマン<sup>29)</sup>が、トレンス川沿いの、アデレードの北東約6キロはなれた所にあるアングスによって提供された土地に連れて行き、そこに落ちついた。彼らはこの新しい村に、かつてかれらがプロイセンで住んでいた町と同様に、クレムツイヒの名前を付けた。そこで彼らは2・3ヶ月のうちに家を建て、堅い土壌で、水が不足していたが、菜園を造り始めた。クレムツイヒの野菜市場は、植民地が必死になって新鮮な食料生産を必要としていたこともあって、やがて評判と財政的成功を得た。

その後さらに、他の2隻の船(ゼブラ号とカタリナ号)が到着した。彼らは全員がクレムツイヒおよびその周辺からの人たちであり、プロイセンでカーヴェル牧師と連携していたルター派の同志たちであった。ゼブラ号は12月30日にアデレード港に錨を降ろした。航海中にはあらゆる健康の問題とトラブルがあったにも拘らず、乗客たちの示した宗教的真摯さと誠意は船長のハーンに深い印象を残し、将来に於ける彼らの幸せに彼の個人的関心を持つきっかけとなった。カーヴェル牧師は、彼の仲間は全員一つの地区に住むべきであると常に願っていたので、新たに到着した人々がクレムツイヒに来て仲間に加わるよう望んだが、彼らは、自分たち全員に充分に適しい土地がそこにはあるのかどうか、疑わしく思い、船長ハーンの忠告にしたがい、そこに行くのを止めた。

南オーストラリアはもともと英国の植民地としてつくられたと言うよりは、エドワード・ギボン・ウェイクフィールド<sup>30)</sup>によって推進された考えに従って植民地化されたところであり、王室

の領地は除いて、イギリスから来た労働者が十分に購入できる価格で土地は売られるべきであるとしていた。政府に依存せず、英国の税の分配から独立して、自助の精神で植民地経営をするのが最善の方法であるという考えであった。そしてこの考え方は実際に生かされていた。アデレイドの裕福な創設者たちは、労働者たちが土地を手に入れることで、勤勉で真面目な人間になるとの思いから、土地を提供した。当地の労働賃金は高く、土地は安かったのも、そこで労働者たちは、一生懸命にきつい仕事に耐え、生活を切り詰め、土地を購入し、まず農業をすることから始めていた。

ドイツ・ルター派の人々は彼らの信仰のためにプロイセン政府の下で弾圧を受けていたので、彼らは政府からは何も望まず、また実際に、政府とは何の関わりを持つとはしなかった。唯一の願いは、彼らのやり方で神を礼拝できるようにそとさせて置いて欲しいということであり、そして彼ら自身の努力によって、自らの土地を手に入れる機会を与えて貰うことであった。彼らは、まさにその点では、自助精神を具現しうるすぐれた見本であり、南オーストラリアが求める人材にかなっていて、この土地の今後の発展を担える人たちであった。

ハーン船長は彼の船の乗客たちにクレムツイヒで土地を入手しないように忠告したが、それは、土壌が十分に肥沃ではないと感じたからであった。彼は、アデレイド丘陵に彼らが定住の土地を獲得すべく、交渉を助け、60ヘクタールの豊かな土地を手に入れさせた。ルター派の人たちは、港からかれらの新たな定住地までの50キロを徒歩で、手押し車に荷物を乗せて、約3カ月かけて到着した。貧しくて、荷馬車を雇えなかったのである。旅行中、彼らの面倒を良くみてくれて、引き続き南オーストラリアでの彼らの福利に関わった船長への感謝の気持ちから、彼らはこの村にハーンドルフ（ハーンの村）という名を付けた。

ルター派の人々は新しい定住地（ハーンドルフ）への長い道のりの途上でアボリジニの人たちに食料を多く与えたので、到着すると底を尽き、草、トカゲ、フクロネズミ、木の根などを食べるはめになった。そのため、多くのものが寒さと病



ハーンドルフのハーン船長の記念碑

気のため最初の冬の間死んだ。しかし、クレムツイヒの人たちと同様に、やがて彼らはアデレイドの市場へ野菜を売りに行ったり、当地のイギリス人の大地主の所で働いた。とくにドイツ女性は優秀な羊毛刈り込み人としての評判をえたという<sup>31)</sup>。

カタリナ号は1839年1月末に到着した。この一行にはポーゼンからのひとびと、ブランデンブルクからのひとびと、それに若干のシュレーゲンからのひとびとがいた。彼らにはゼブラ号のハーン船長のような支援者はいなかったため、自分たちですべてを手配しなければならなかった。彼らの大部分は最初にグレン・オズモンドに入植し、2・3年そこに定住したが、この地域は発展の望みがあまりなかったため、後にかれらの多くは教会を求めてクレムツイヒに移動した。クレムツイヒにはカーヴェル牧師が居を構えていた。しかし彼は礼拝のため各信仰共同体を巡っていた。

オーストラリアにおける最初のルター派教会信徒集会在グレン・オズモンドで1839年5月23、24日に開かれた。カーヴェル牧師、長老たち、そしてクレムツイヒ、ハーンドルフ、グレン・オズモンドからの投票権を持った代表者たちは、この2日間すべてを脇に置いて、彼らの出来たての集団のために教会生活を具体化することに尽力した。信徒を組織し、教会を設立することが優先課

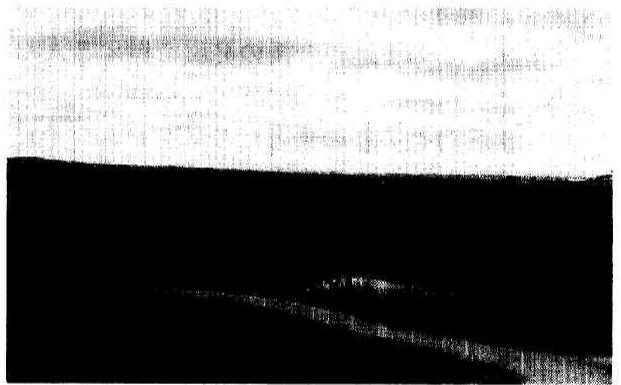
題であった。3つの重大な決定がなされた。第一に集会は「南オーストラリアに於けるクレムツイヒ、ハーンドルフ、グレン・オズモンドの福音主義信仰共同体の規定」を採択した。これは、‘使徒的’規定と呼ばれたが、カーヴェル牧師は、教会の手續きと実践に関する彼の仕組みは新約聖書の使徒のものとは全く一致していると完全に確信して、最初からむしろ大げさにこう呼ぶことに何の躊躇もしなかった。これはわくわくするような要求であったが、後に他の要素とも絡んで、オーストラリア・ルター派教会の中に痛みをもたらすことになった<sup>32)</sup>。第二に、クレムツイヒは教会の中心として不適当と見なされていたので、アデレイドの北ほぼ70キロにあるバロッサ・ヴァレイのゴウラー川沿いの土地840ヘクタールをアンガスから購入することにした。これはかなり大胆な計画であった。この土地は、ラングマイル（クレムツイヒと同様、プロイセンの町の名）と呼ばれることになった。第三に集会は、フリッチェ牧師<sup>33)</sup>とその教区民に、他の抵抗派の牧師や信仰共同体と同様に、移民するよう招請の決定をした。

フリッチェ牧師は、招請に応じて、信徒200人とスキョルド号で1841年10月27日にアデレイド港に着いた。航海の途中で大人と子供合わせて52人が命を落とすという悲しむべき事態があった。航海はそれ故彼らにとってトラウマとなった。一行は三つのグループに分かれた。最初フリッチェ牧師とハーンドルフへ行ったグループは、やがて1842年早々に、アデレイド丘陵のさほど遠くない地域に移った。ここは、ローベタール（「称讃の谷」の意味）と名付けられた。そしてフリッチェ牧師はここに彼の本拠を置いた。

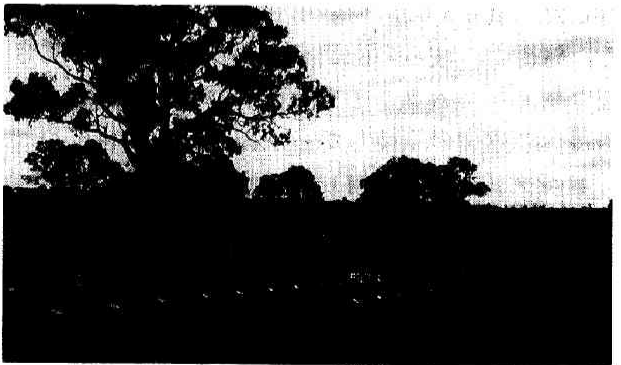
同じ頃、バロッサ・ヴァレイに入植が始まっていた。最初の入植地はシュレーゲンからの28家族によって1842年初めに開かれたベターニエンであった。1842年、ベターニエンのすぐ後に、カーヴェル牧師の信徒、ドイツ・ルター派の移民がラングマイル（現在のタヌンダの一部）と名付けた新しい村を築いた。1843年以降クレムツイヒの人々はバロッサ・ヴァレイに移動し、さらにハーンドルフからの人々、あるいは船から直行の人々も加わった。こうして、長さ40キロメー

ル、幅8キロメートルの谷に、1840年代から1850年代にかけて幾つものドイツ人の集落ができた。1850年代の初め頃までは、宗教的非寛容の復活を恐れて迫害の時代を生きてきた多くの人たちのように、閉鎖的な宗教共同体、あるいは信仰共同体の人々が当地へ引き続きやってきた。さらに、精神的道徳的強さを与えてもらうために、信仰共同体に移民として参加したいという人々もやってきた。1851年までに南オーストラリアへ来た約7千人の半数は宗教的共同体のメンバーとしてやってきた<sup>34)</sup>。今日バロッサ・ヴァレイは世界的によく知られたオーストラリアを代表するワイン生産地であるが、ここに移住したルター派の農民によって、1840年にまず自家用の小量生産からワイン造りが始められている<sup>35)</sup>。

こうして、ルター派の信仰共同体としての基盤が整った。カーヴェル牧師とその信徒たちが祖国の宗教弾圧から逃れて、いわば宗教的亡命者として、南オーストラリアに自らの信仰の自由を守る場所を求め、幾多の苦難を乗り越えて、いまよ



バロッサ・ヴァレイのブドウ畑



ベターニエンのルター派初期移民の墓地



うやくその夢を実現できる安住の地を確保できたのである。まさに彼らの夢の実現が間近に迫ったのである。そしてこの夢の実現のために生涯を捧げたカーヴェル牧師はこのヴァロッサ・ヴァレイのラングマイルで1860年2月12日に亡くなった。しかし彼の意思は信仰共同体の中に引き継がれて行くのである。そして今日バロッサ・ヴァレイで目にする繁栄は、この地で土になったルター派の人々の夢が子孫の世代で実現されていることを示していると言えよう。

### おわりに

以上のように、ドイツ・ルター派の人たちは彼らの自由な信仰の場を確保し、生活の基盤を整え、祖国でえがいた夢の実現に近づいたのであるが、すべてが必ずしもバラ色の夢物語ばかりではなかった。夢が破れた、辛い話も多々あるのである。

例えば<sup>36)</sup>、1847年に開かれたホフヌングスタール(「希望の谷」の意味)は主にポーゼンからの約20家族と若干の独身男性が20年間土地の貸与を受け、それぞれ8~20ヘクタールを耕作していた。谷は肥沃で、湧き水は無尽蔵であった。ドイツ・ルター派の人々は彼らの粗末な小屋を道沿いに、典型的なドイツの町並みスタイルで、建てた。村の外れの少し小高い所に教会と教師の住居が建てられ、村の反対側の外れには墓地がおかれた。村はゆるやかに起伏する丘の間に美しく横たわっていた。毎年彼らは、彼らを新しい土地に連れてきてくれた神に感謝しながら、ドイツから移民してきた記念日を祝っていた。村には職人も多く、人々は小麦、大麦、ライ麦、オート麦、えんどう豆、豆、レンズ豆、馬鈴薯を作っていた。村は豊かであった。アボリジニの人たちがしばしば丘の中腹にすわって、これら新しく来た人たちが谷で自分たちの以前の狩り場を斧や火を燃やして破壊するのを一日中見ていた。アボリジニたちはルター派の人たちに、大雨の後で、時には洪水がおきて、彼らが造った耕地を襲うと話した。しかし、新しく来た人たちは、まだオーストラリアの気まぐれな気候に馴染んでいなかったのも、余り注意を払わなかった。野菜や穀物類に加えて、

灌木の茂みの中に沢山いるカモやバタンを捕まえて食し、カンガルーは普通はベーコンとガーリックで調理し焼き肉にした。このような平和の生活が数年続いた。広大な灌木の大地が切り開かれ、移住者たちはこの地に定住したと感じ始め、快適であった。しかし、まさにそのようなとき、1853年10月に災害がこの村を襲った。一昼夜の雨の後に大洪水がやってきて、家屋や畑を流し去ってしまった。踏みとどまろうと思ったものもいたが、再建は不可能であった。住民たちは如何ともしがたく、或ものはバロッサ・ヴァレイのノイ・メクレンブルクへ行き、また或ものはアメリカへと去った。教会はその後数年間残っていたが、荒廃し、やがて石は持ち運ばれ、他の建物のために使われた。現在は礎石だけが残っている。墓地の古い木の十字架も朽ち、大通りさえ少なからず石の堆積の山である。まさに、夢破れて山河ありである。そしていま、われわれをして想い起こさせるのは、新天地と神とに信頼をよせて、ひたむきに生きた人々のことである。

以上のように、ドイツ・ルター派の人々はすべてが順調に行っただけではなく、幾多の艱難辛苦を味わいながら、個々の成功と失敗を飲み込みながら、全体として新天地での夢を実現できたのである。南オーストラリアへ移住してきた人たちは、カーヴェル牧師と同じ宗派であり、彼と彼の信徒たちには亡命の道しか残されていなかった。それ故彼らにとってこの新しい土地での失敗は許されなかった。つまり、退路は断たれていたのである。彼らは信仰に篤く、正直者で、ほとんど全員が厳しい労働に耐えた。彼らは最初にこの新天地に来たものとして、土台を築いた。そしてこの基盤の上に、その後数年間ドイツから移民の波が押し寄せたのである。新しい移民たちは、物質的によりよい生活を望んでいただけでなく、精神的にも肉体的にも健康な生活、自分たちと同様に子供たちにとってもより大きな可能性をもたらす生活を望んでいた。

このように、いわば背水の陣の最初のルター派の移民以来、南オーストラリアでのドイツ人移民の人口も増えるが、これは同時に、ドイツ人がここでしっかりと根を張り、その地盤を磐石の

ものにもつなげるのである。ルター派の人々は大部分農民として努力し、そのために彼らは尊敬を勝ち得たのであり、その影響力を及ぼすことが出来るのである。それ故土地は、ドイツ人の富みにとって最も重要なものである。

ところでオーストラリアは、近年わが国と徐々に交流の密度が濃くなってきてはいるが、例えばアメリカ合衆国などと比べると、まだまだその存在感はわが国ではうすい。われわれのこの国についての認識もせいぜい資源大国か、シルバー世代の移住先、あるいは観光旅行の対象止まりであろう。建国210年を経たばかりの歴史の若い国のせいもあるが、アングロサクソン系住民がこの国の成立に深く関わり、大多数を占めることから、いわゆる白豪主義を取ってきて、アジアに対して門戸を閉ざしてきたせいかもしれない。しかしオーストラリアはこの白豪主義を脱して、方向転換を果たした。アジアの一員として生きようと大きく舵を切った。東チモールへの対応の速さもその意思の表れであろう。そのせいか近年とみにその存在感をアジアに於いて示すようになってきた。さらに、オーストラリアにはいまや世界中から人々が移り住んでいる。その結果、否応なしに多文化主義社会に移行し、そのなかで新しいオーストラリア人が形成されて行くのであろう。しかし、反面、このような文化的混融の中で、出自の民族文化を維持しようとする動きも当然ながら強まってくる。ドイツ系の人たちも例外ではない。

ドイツの伝統文化を継ぐものとして、ドイツ系の人々の多い南オーストラリアでは、毎年故郷ドイツを偲ぶ色々な祭が行われていて、観光の目玉ともなっている。また、多くの観光客を引きつけている観光地、例えばハーンドルフは、ドイツを売りものにしてはいるが、実のところバイエルン風の色彩の極めて強い観光地である。いまやドイツと言えばバイエルンと想うところに、ドイツ移民の子孫の間でさえ、すでにドイツは風化していて、意識の変化が見られる。もともとこの地に移住してきた人たちは主としてプロイセンからであった。しかしプロイセンを偲ばせる姿はなく、もはや観光の対象としてのドイツ（すなわちバイエルン）しかなく、その意味で祖国ドイツは遠く

なったのである。

ドイツ系の人々は非イギリス系としては最大の民族集団であるが、ほとんどのオーストラリア人は、オーストラリアに於けるドイツのことについてはルードヴィヒ・ライヒハルト<sup>37)</sup>以上の知識を持っていないと言われている。それほどドイツの影は薄いですが、これにはこの前の世界大戦が大いに影響している。ドイツ系住民の多い地域でさえ、彼らはかなり肩身の狭い思いを強いられ、また差別を受けたと言う<sup>38)</sup>。

ドイツ系の人々の比率が高い南オーストラリアのアデレード周辺では、ドイツ人は社会のすべての階層にみだされるし、ドイツ人のコミュニティも存在する。それでもドイツ移民の子孫であることをほとんど自覚していない世代がすでに登場していて、その数はいまや決して少なくはないのである。そのため若い人たちに対して、ドイツ語教育を始めとして、ドイツ人としての自覚を忘れないような方策が色々とりられている。ドイツ系の人々はドイツを背負いながらも多文化主義の下でそれなりにオーストラリア人になり切っていると言える。彼らは移民のごく初期から、経済的理由から英語のみを話す環境の中でしか生き残らたくはなかったと言うこともあり、バイ・リングルでバイ・カルチャーであった。

われわれは、これからこの国と同じアジアのメンバーとして付き合いを深めて行くと思われるが、この国の良質な部分を支えているものに、ドイツ人移民、とりわけ移民初期のルター派の人々の子孫が属しているのを想起すると同時に、記憶していてよいであろう。

#### 注

- 1) 本稿で以下扱う南オーストラリアへのドイツ移民の「ドイツ」は、言葉としては存在していたが、国家としてはまだ存在していなかった。統一ドイツが成立するのは1871年であり、しかしそれ以前の19世紀前半にはすでに移民が始まっていて、それらは主としてプロイセンからであった。
- 2) 堀 武昭「オーストラリアの日々—複合多文化国家の現在—」, 1992年, 2頁。
- 3) 同書, 95-96頁から引用。オーストラリアの作家ザビア・ハーバード氏の発言。
- 4) 藤川隆雄「大洋を渡る女たち—十九世紀オーストラリアへの移民」, 監修 望田幸男・村岡健次

- 「近代ヨーロッパの探究1 移民」, 1998年, 131-132頁.
- 5) 同書, 134頁.
  - 6) 林 健太郎編「ドイツ史」(新版), 昭和52年, 220頁.
  - 7) 同書, 224頁.
  - 8) 木谷 勤/望田幸男編著「ドイツ近代史」—18世紀から現代まで—, 1992年, 34-37頁.
  - 9) 林 健太郎編「ドイツ史」, 239頁.
  - 10) 同書, 245頁.
  - 11) 1613年にブランデンブルク選帝侯ヨーハン・ジギスムントが改革(カルヴィン)派に改宗したが, 臣民はほとんどルター派に留まった. 以来, 王と民は異なった教会に属したので, 両派の合同がそれ以後の王たちの願いであった. 両派の間にあった憎しみも次第に解消し, 王の後ろだてと, オランダやフランスからの避難民の移住などで, 改革派がより強力になった. と同時に, 敬虔主義と合理主義が厳格なルター派の教義の影響力を弱めたので, 国王は祖先伝来の懸案を解決しようとした. しかし, 両派の完全な統一は得られず, 新しい大きなプロイセン福音派領邦教会, 小さな独立のルター派教会, 改革派教会が形成された.
  - 12) ディーター・ラフ「ドイツ近現代史」(松本 彰, 芝野由和, 清水正義訳), 1990年, 60-61頁.
  - 13) 「あのごく少数の者たちは, ほとんどキリスト教的ではないので, 領邦教会の敵(すなわちルター派)が領邦教会の支持者と対立して分離の宗教的組織を結成するのを叶えてあげよう」といった要旨である.
  - 14) ヨーハン・ジギスムント選定侯は1614年の勅令の中で, 「もしこの勅令によって信仰が侵害されたと思う者は, 何の妨げもなく他国へ行ける自由を有する」旨述べている. そして, 例えば1835年末にはクレムツイヒの信徒集会は移住(移民)の決定をしていた. 移住地として初めはコウカサス, 次いでロシア, それからアメリカおよび他の国々が考えられていた. 1826年以来このルター派教会の牧師であったカーヴェル(注21)参照)は, 信徒に多大な影響を及ぼしていた.
  - 15) David Schubert (ed.): Because of their beliefs, 1995, S. 10.
  - 16) a.a.0., S. 10.
  - 17) a.a.0., S. 10. から引用.
  - 18) 賛成の理由は, 1. 聖書は逃亡を禁じていない 2. 移住は, 罰金と財産の没収によってルター派の人々がより貧しくなり, ますます困難となるであろう 3. 迫害は恐らく続行し, ますます悪化するであろう 4. 迫害が続いて, 信心深い者の数が減少するであろう 5. 霊魂は移住によって守られるであろう 6. 移住(民)の運動はすでに実際に始まっていて, 旅券の申請もなされている 7. 北アメリカ(人々が移住しようと計画していた)は宗教的自由のある国である. 反対理由は, 1. 聖書の数節は, 例えばエルサレムからの逃亡のように, 逃亡について述べてはいるが, 自由に選択された逃亡についてはない. 2. 実際聖書は逃亡について明白な指示を与えていない 3. 多くの者にとって, 移住(民)はより安易な選択であるように思われる, むしろまだより大きな苦難を待望すべきである 4. 霊魂はこの苦難の時を通して強められるであろう 5. 最初のキリスト教徒はローマ帝国から移住して来たかも知れないが, したのではない 6. 明らかにわれわれは反キリスト者を前にした時代に生きている 7. 神は迫害を通してその信仰共同体をつくっている 8. 移住するよにとのルター派への忠告は領邦教会の人たちから来ているが, 敵の忠告には従うべきではない 9. 神がその王国を我々の間に, 我々を通して, 我々の周りに広げているとき, われわれは神に逆らうべきではない.
  - 19) David Schubert (ed.): a.a.0., S. 11.
  - 20) a.a.0., S. 13.
  - 21) Rev. August Ludwig Christian Kavel (1778-1860). ルター派の牧師で, 移民(移住)運動を組織・指導し, 移住後, 南オーストラリアに於けるドイツ移民の精神的指導者となる.
  - 22) 実は, 宗教的理由ということになると, 南オーストラリアに来たのはカーヴェル牧師のグループが最初ではないとも言える. 彼らより1カ月早い, 1838年10月13日にドレースデン(ザクセン)から2人のルター派の伝道師(C. シュルマンとC. タイヒェルマン)が到着した. しかし, 彼らの目的はアデレイド周辺でのアボリジニの宣教であった. 従って, 宗教迫害を受けて祖国を脱し, 新天地に宗教的自由を求めてこの地にきたという点では, 彼らが最初のグループである. なお, カーヴェル牧師のグループが来るまでは, 僅か66名のドイツ人が居ただけである.
  - 23) カーヴェル牧師は, 許可がなかなかでないのも, もし彼らの固有の教会をもてるなら, ロシア皇帝の約束もあり, 一時は, ロシアへ行くことも考慮した. なお, アメリカへは「植民地時代」の1683年にフィラデルフィアに最初のドイツ人の大グループが上陸した. 以来アメリカはドイツ人の最も好む移住地となった. その理由としては, アメリカには経済的自由, 宗教的自由があり, 政治的抑圧が無いこと, 徴兵制がないことなどが考えられる.
  - 24) George Fife Angas (1789-1879) は富裕なイギリスの商人で, オーストラリアに広大な土地を所有し, オーストラリアに於ける植民地経営の大会社(南オーストラリア会社)の経営者であった. イギリス政府と密接に携わって南オーストラリアを開発していた. 彼はカーヴェル牧師のグループを金銭的にも援助した. 彼なくしては, おそらくルター派の南オーストラリアへの移民はありえなかったであろう. その意味で忘れてはならない人物である. なお, 詳細は Everad Leske: For

- Faith and Freedom. The Story of Lutherans in Australia 1938-1996, 1996, S. 21-29. 参照.
- 25) Ian Harmstorf/Michael Cigler: The Germans in Australia, 1985, S. 14., David Schubert(ed): a.a.0., S. 21.
- 26) David Schubert(ed): a.a.0., S. 22.
- 27) Everad Leske: a.a.0., S. 31.
- 28) Everad Leske: a.a.0., S. 39-53.
- 29) Charles Flaxmann. アンガスの個人秘書で、彼の代理人としてルター派の移民に終始関わった.
- 30) The National Library of Scotland: That Land of Exiles. Scots in Australia, 1988, S. 31.
- 31) Ian Harmstorf/Michael Cigler: a.a.0., S. 16.
- 32) Everad Leske: a.a.0., S. 33-34.
- 33) Gotthard Daniel Fritzsche (1797-1863). ルター派の牧師. 神学者として、またプロイセン政府の「分離」ルター派教会活動に対する禁止令への彼の大胆な公然の抵抗とルター派信仰共同体への忠誠でよく知られている。カーヴェル牧師の強い招請で、信徒と共に南オーストラリアに移住する。以後、カーヴェル牧師と協力して教会の発展に尽くすが、やがて、教義の問題で不一致となり分かれる。ルター派教会は二つに分離し、これ以後のドイツ・ルター派の移民はどちらかの一つの教会に所属するという、困難な状況に直面することになった.
- 34) Ian Harmstorf/Michael Cigler: a.a.0., S. 18.
- 35) Sue Barker (ed.): Explore the Barossa, 1991, S. 27.
- 36) 以下の引用は、Ian Harmstorf/Michael Cigler: a.a.0., S. 21-23. による.
- 37) Ludwig Leichhart (1813-?). プロイセンの名目上ルター派の家で生まれる。1842年にシドニーに来る。ニュー・サウス・ウエルズ、クィーンズランド、ノーザン・テリトリーの探検家。1848年に東から西へ大陸横断中に仲間5名と共に行方不明となる.
- 38) 例えば、ドイツ人であることを隠すために、一見してドイツ人であると判るような名前は、イギリス風に変えたり、家でもドイツ語を話さないようにするといった状況があったという.

## In Search of Land of Religious Freedom

—The First German Immigrants in South Australia—

NAKAMURA Kohei

In 1817 the King of Prussia, Friedrich Wilhelm III, had decreed that one prayer book should be used by all Protestants in Prussia. He thought that to be strong, a country should be united in one belief. After persuasion had failed, the king tried in the early 1830s to force the 'Old Lutherans' to use his form of prayer book. They refused to join the State Union Church and to use the new form of service. They were fighting the Prussian state, and they were therefore looked upon as traitors and rebels. They thought that it had already been difficult to remain in Prussia for their belief. Then they decided to emigrate. A group of parishioners in Klemzig was especially eager to emigrate, and their pastor was August Ludwig Christian Kavel. Initially they decided to go to Russia, later the destination was changed to America. However, at that time, Pastor Kavel learnt of the new colony of South Australia, and with a great help and support of George Fife Angas they finally could come to South Australia in November 1938. Pastor Kavel wrote letters to Germany urging other persecuted Lutherans to join them. Gotthard Daniel Fritzsche, a fellow pastor from the same region, had been particularly hounded by the government and was persuaded by his congregations to emigrate to South Australia. They arrived at Port Adelaide in October 1841. They built together their church and the settlements in the Barossa Valley, and they could now enjoy their life, thanking God. The foundation was established. They gained at last their land of religious freedom here in South Australia after many difficulties. The Lutherans realized their dream.

キーワード	The Old Lutheran Church (ルター派教会)	religious exile (宗教的亡命)	South Australia (南オーストラリア)
-------	----------------------------------	-------------------------	----------------------------